

コリント人への手紙第二10章 「高ぶる者たちへの対処」

1A 優しさに隠れた力 1-6

1B 「肉に従って歩んでいる」という批判 1-3

2B 神にある戦いの武器 4-6

2A うわべを見ている人々 7-11

1B 建てるための主の権威 7-8

2B 手紙と実際の格差 9-11

3A 限度内の誇り 12-18

1B コリントへの福音宣教 12-14

2B 向こうの地域への福音宣教 15-18

本文

コリント人への手紙第二 10 章を開いてください。残り、4 章になりましたが、パウロが、コリントの中に蠢いている問題に取り組みます。「問題の中にある、問題」と呼んでもよいでしょうか、いろいろな問題の背後にあった、癌みたいな存在です。第一の手紙も含めて、第二の手紙の背景になっているのは、コリントの人々を煽り、問題を引き起こしている偽使徒たちがいます。コリントの教会は、パウロによって始まって、パウロによって建て上げられました。けれども、後でこれら偽教師たちがやって来て、コリントにある問題を取り上げて、それでパウロの信頼を引き落とし、そして自分自身にひきつけて行こうとする者たちがいました。そのために、コリントの人々のパウロへの信頼がかなり揺らいでしまったのです。

それで、パウロは信頼回復のために、非常に気を使いました。それが第二コリントの内容です。彼が先に送った厳しい手紙を、彼らがどう受け止めているのかが気が気でなりません。その報告をテスガしてくれて、彼らが悔い改めにおいて熱心であることを知ったのです。それで、彼は大きな慰めを得ました。それで、自分の彼らに対する信頼に確信が持てました。それが 7 章までの話ですが、8-9 章では、こういったごたごたで、当初、熱心に行っていた、エルサレムの貧しい兄弟のための献金が中断していたことを、パウロは取り上げています。そして、また熱心になって、用意してほしいとお願いします。

これで、多くのことが解決しています。けれども、それでもなお、残党というか、偽使徒たちが依然としているということと、それに付いて行く、いつまでも頑なな者たちが一部にいます。そこで、パウロは、伝家の宝刀ではないですが、次の訪問時に、使徒に与えられた権威を行使して、それら偽使徒たちを処罰する用意をすることを告げていくのです。

これは、いわば、悪霊の巣窟になっている要塞に、爆弾を落とすようなものです。巻き添えにならないように、偽使徒たちに付いて行っている者たち、影響を受けているものたちにも警告を發します。コラの反乱のことを思い出してください。コラや他の首謀者たちが、地面が割れて生きたまま陰府に投げ込まれました。けれども、彼らに影響されたイスラエル人たちが、危うく、巻き添えになりました。また、その後で不満を言って、殺されてしまいました。モーセは謙虚でありながら、主にはそのような大きな権威と力が与えられていましたが、同じように使徒パウロにも、主イエスご自身からの権威が与えられていたのです。

1A 優しさに隠れた力 1-6

1B 「肉に従って歩んでいる」という批判 1-3

¹さて、あなたがたの間において顔を合わせているときはおとなしいのに、離れているとあなたがたに対して強気になる私パウロ自身が、キリストの柔和さと優しさをもってあなたがたにお願いします。

ここの自己紹介、顔を合わせているときはおとなしいけれども、離れている時は強気になっているというのは、パウロを評価している偽使徒たち、またそれに追従する者たちの言葉です。後で、直接の引用をしていますが、「10:10 「パウロの手紙は重みがあって力強いが、実際に会ってみると弱々しく、話は大したことはない」と言う人たちがいるからです。」こんな評価をしていたのです。つまり、ネットなどで匿名で書くと、ものすごく強気なことを書いているのに、実際に会えば弱々しくふるまう、というような見方です。こうやって、彼らはパウロの人格を攻撃していました。

しかし、パウロは、「キリストの柔和さと優しさをもって」と言っています。これはちょうど、イエス様が、弟子たちにお語りになった言葉を意識したものではないか？と思います。「マタ 11:29 わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。」イエス様ご自身が、柔和でへりくだっているとされています。けれども、これは弱いということでは全然ありませんね。ご自身は全能の力を身にまわられています。しかし、その力を内に秘めておられて、人々を立ち直らせ、建て上げるために用いられ、弱っている人々には柔和に、へりくだって接して行かれるのです。重装備の自衛隊の人が、普段は、小さな子を助けたり、お婆さんを背負ったり、弱い人々、小さい人々を支えるのですが、いざ敵が来たらその敵に力を持って対峙します。

それと同じように、主は、その力を内に秘めておられました。イザヤ書には、興味深いメシア預言があります。「イザ 49:2 主は私の口を鋭い剣のようにし、御手の陰に私をかきまい、私を研ぎ澄まされた矢とし、主の矢筒の中に私を隠された。」主イエスは、再臨される時に、その口から剣を出して、諸国の軍隊を滅ぼされますが、しかし、初めに来られた時は、その力を矢筒の中に隠された矢のようにしておられた、ということです。主は、その全能のお力を優しく、柔和に、倒れている人を立ち直らせるために用いられたのです。それと同じように、パウロは、主イエスの権能が与え

られていたけれども、それを人々を立たせるために使って言っているのであり、それが、ここで言っている、「キリストの柔和さと優しさをもって」ということです。これを彼らは、パウロは弱々しいと言って、うわべで裁いていたのです。

² 私たちが肉に従って歩んでいると見なす人たちに対しては、大胆にふるまうべきだと私は考えていますが、そちらに行ったときに、その確信から強気にふるまわないですむように願います。

彼らは、パウロたちのことを「肉に従って歩んでいる」とも、みなしていました。キリストの柔和さと優しさをもって対処している彼らのことを、うわべだけを見て、肉に従っていると責めたのです。ずっと前に読んだ本で、牧師の奮闘記みたいな題名のものでした。何か悩みのある若者がいて、その著者の牧師さんは、一緒に遊んであげたそうです。けれども、その若者は、教会の人々に、「あの牧師は、暇な人だよ。こんな趣味があつてさ・・。」と、一緒に遊んだことがあたかも、彼が好んでやっていたように、人々に言いふらしました。そうやって一緒に遊んであげた後で、週末、ほとんど徹夜で説教の準備をして、それで日曜の奉仕に臨んだということを知らないで、ということを書いています。ローマ 15 章 1 節には、「私たち力のある者たちは、力のない人たちの弱さを担うべきであり、自分を喜ばせるべきではありません。」とあります。弱さを担っている奉仕を、実際に弱い、肉に従って歩んでいると責めていたのです。

しかし、そのようなこと言っている者たちには、「大胆にふるまうべき」と言っていますね。まさに、羊飼いが羊を杖で優しく導いているのに、狼がやってきたら、殺してでも羊を守るべく戦うように、パウロが、使徒として与えられている権威をもって力をもって対処することを意味しています。けれども、本来ならそんなことはしたくないのです。それで、強気にふるまわないですむように願います、と言っています。

³ 私たちは肉にあつて歩んではいても、肉に従って戦ってはいません。

この大きな違い、分かりますね？肉にあつて歩んでいるというのは、パウロがかつて、4 章 7 節で、「土の器」と表現したとおりです。肉体という制限の中で、いろいろな苦しみを経てきました。そうした肉体にある弱さを抱えながら、パウロたちは宣教の働きをしていきました。しかし、肉の欲に任せて動いていたわけではありません。肉にある弱さといっても、それは肉体にある限界や弱さであつて、肉の欲に従ってしまう弱さのことを言いません。

2B 神にある戦いの武器 4-6

⁴ 私たちの戦いの武器は肉のものではなく、神のために要塞を打ち倒す力があるものです。

私たちは、肉体にある弱さを持っており、目に見える世界、肉の世界に生きています。ですから、

目に見えるところで繰り広げられることに対して、目に見えるもの、肉によって対処しようとしてしまいます。例えば、私たちが不当な扱いを受けたら、警察に届けたり、裁判で告訴したりします。これが、肉に従って戦うということです。こういった行動も必要なことがあるでしょう。けれども、聖書は目に見える肉の世界だけではなく、目に見えない霊の世界があることを語っています。「エペ 6:12 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです。」

この霊の世界が、実際は肉の世界を動かしているのです。私たちクリスチャンは、このことに気づかなければいけません。私たちは肉の中に歩んでいるのですが、肉の武器をもって戦ってはならないのです。まず霊の武器を取り上げて、その武器によって、目に見えるところにある問題に対処するのです。エペソ書 6 章に、真理の帯、正義の胸当て、救いのかぶと、福音の備えの履物があります。そして、信仰の大盾、御言葉の剣、そして最後に御霊による祈りがあります。これらを身につけ、また取り上げて、肉の世界で起こっていることに立ち向かっていくのです。そして、その武器は、「神のために要塞を打ち倒す力がある」とパウロは言っています。なぜなら、キリストがすでに、十字架と復活のみわざによって、すでに悪魔に勝利されたからです。コロサイ 2 章 15 節には、「様々な支配と権威の武装を解除し、それらをキリストの凱旋の行列に捕虜として加えて、さらしものにされました。」と書いてあります。

ですから、私たちが霊の武器を用いないことは、本当に滑稽なことなのです。悪魔は、何とかして私たちを肉の領域に引き込もうとします。問題を起こして、私たちを慌てふためかせ、落胆させ、自分たちで対処させようとしています。しかし、私たちが一歩引き下がって、祈り始めたらどうなるでしょうか。「神さま、イエスの御名によって、この問題に立ち向かいます。あなたは、御子にあって、すでに勝利を与えてくださいました。」と祈り始めたときに、決定的な打撃をサタンに加えることとなります。私たちはすでに勝利者なのですから、霊の領域に入ればもうこちらのものです。ですから、私たちの課題は、すぐに霊の戦いであることに気づくことです。霊の戦いであることに気づけば、すぐ祈ることができます。祈ることができれば、悪魔に立ち向かうことができます。立ち向かうことができれば、悪魔は逃げていきます。そして、問題は解決へと向かいます。

⁵ 私たちは様々な議論と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち倒し、また、すべてのはかりごとを取り押さえて、キリストに服従させます。

これは、偽使徒たちが行っていることで、様々な議論を吹っかけてきます。そして、神の知識に逆らってあらゆる高ぶりを抱いています。そしていろいろな企み、はかりごとを持っています。エペソでも、後にテモテが牧会をしている時に同じような問題がありました。いろいろな議論をしかけて、高ぶっている問題です。「1 テモ 6:4 その人は高慢になっていて、何一つ理解しておらず、議論やことばの争いをする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、ののしり、邪推、絶え間

ない言い争いが生じます。」これらの背後には往々にして悪霊が働いています。議論に対して議論ではなく、霊の武器によってキリストに服従させるということです。

使徒の働き 13 章では、パウロが、バルイエスという魔術師に対してこのような処置を取ったのを見ることができます。バルナバとパウロを迎えた総督セルギオ・パウロを何とかして信仰の道から遠ざけようとしたのですが、パウロは、聖霊に満たされて、彼をにらみつけ、「13:10-11 こう言った。「ああ、あらゆる偽りとあらゆる悪事に満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、おまえは、主のまっすぐな道を曲げることをやめないのか。11 見よ、主の御手が今、おまえの上にある。おまえは盲目になって、しばらくの間、日の光を見ることができなくなる。」するとたちまち、かすみと闇が彼をおおったため、彼は手を引いてくれる人を探し回った。」人間の狡猾な話ぶりではなく、霊の力で対処します。そして、真理のためならば、何でもすることができると 13 章 8 節で言っています。

⁶また、あなたがたの従順が完全になったとき、あらゆる不従順を罰する用意ができています。

これまでの手紙の内容からして、多くの人たちがすでに従順を学んでいました。そして、ほぼ全てがキリストの教えに従順になっている時には、こうした反逆分子をしっかりと罰するということができます。キリストにある建て上げが優先であり、彼らが整いさえすれば、そうした反逆者を罰することができます。一枚岩になっていないと、そのような厳しい対処は、まだ弱い人、揺らいでいる人たちに害を及ぼしてしまうからです。

2A うわべを見ている人々 7-11

1B 建てるための主の権威 7-8

⁷あなたがたは、うわべのことだけを見えています。もし自分はキリストに属する者だと確信している人がいるなら、その人は、自分がキリストに属しているように、私たちもキリストに属しているということ、もう一度よく考えなさい。

「うわべのことだけ」という問題がありましたね。パウロが、苦しみの中において、また途方に暮れていて、迫害されていて、いろいろな不十分なところが、目に見えるところでは目立ちます。そうしたことをもって、肉に従って歩んでいるとそっぴんしていました。イエスご自身が、そうしたうわべによる裁きを受けておられました。「ヨハ 7:24 うわべで人をさばかないで、正しいさばきを行いなさい。」

そして、そのように裁いている人たちの特徴は、自分たちはキリストに属していると思っているけれども、相手はそうではないように見ていくことです。表面的な違いがあるだけで、相手もキリストに属しているのです。「ロマ 14:4 他人のしもべをさばくあなたは何者ですか。しもべが立つか倒れるか、それは主人次第です。しかし、しもべは立ちます。主は、彼を立たせることがおできになるからです。」この意識、思いがない人は、危険です。むしろ、その人がキリストのからだというものを

わきまえていないので、自分自身の信仰が危うくなります。平たく言えば、カルト化していきます。自分たちこそが正しいのだとする立場です。

⁸あなたがたを倒すためにではなく、建てるために主が私たちに与えてくださった権威について、私が多少誇り過ぎることがあっても、恥とはならないでしょう。

先ほど見てきましたように、主は、人々を立ち上がらせるために、建てるためにご自身の権威を現されました。そうした、人々が立ち上がり、建てることにおいては、そこにすばらしい、神の恵みがあるのですから、それを誇るのには主をほめたたえることにつながります。また、「恥とはならない」とパウロは言っていますが、そうなんです、神の恵みを信じて、誇っていても、後になって、その人が自分の罪で倒れてしまった、つまづいてしまった、ということがあります。そういったことが起こると自分の面子が保てないというか、ずっこけて、がっかりするのですが、けれども、それでも恵みのほうで間違っただろうが、人を裁くことで間違っよりよはるかに、いいわけです。

倒すための権威ではなく、建てるための権威です。主が恵みによって、それぞれの働きに、権威あるいは権限が与えられますが、それを人を倒すために使うようなことがあれば、その人は、偽の働き人の領域に入り込むことになります。イエス様と似つかない姿になってしまうからです。

2B 手紙と実際の格差 9-11

⁹私は、手紙であなたがたを脅しているかのように思われたくありません。

手紙というものの限界がありますね。前も話しましたが、文字や文面は、その人の口調やしぐさが伝わってこないのです、ややもすると誤解を与えてしまいます。パウロが、今、偽使徒を眼中に入れて話していますが、それが、脅しの内容のように見えてしまうのを懸念しています。

¹⁰「パウロの手紙は重みがあって力強いが、実際に会ってみると弱々しく、話は大したことではない」と言う人たちがいるからです。¹¹ そのような人は承知していなさい。私たちは、離れて書く手紙のことばどおりの者として、そちらに行ってもふるまいます。

これが、コリントの一部の人が抱いていた、うわべでの判断でした。私たちが今、読んでいるように、パウロの手紙は、とても重みがあります。しっかりしています。けれども、パウロ自身は、それほど雄弁ではなかったようです。そして見た目も、お世辞にも良いとは言えないことは、言い伝えて分かっています。コリント第一で見ましたが、ギリシアの文化では、話し方がとても大事になりました。またその立ち振る舞いとか、見た目が大事でした。単なる話者ではなく、ちょっとした演者であったのです。そうした中に偽使徒たちがやって来ました。表向きの見た目が、そうしたコリントの人たちの好みとパウロはずれていたのです、その部分を付いてきたのです。しかしパウロは、手紙

を書いている時に用いている使徒の権威を、人々に会う時にも用いて厳しく対処します。

3A 限度内の誇り 12-18

それからパウロは、偽使徒たちが、推薦状を持って自分たちを推薦しているという問題を取り上げます。覚えていますか、3章でパウロは、自分たちの推薦状はコリントの人たちには必要ないということをお話していました。「3:1-2 私たちは、まともや自分を推薦しようとしているのでしょうか。それとも、ある人々のように、あなたがたに宛てた推薦状とか、あなたがたからの推薦状とか、私たちに必要なのでしょうか。2 私たちの推薦状はあなたがたです。それは私たちの心に書き記されていて、すべての人に知られ、また読まれています。」人々の心に、御霊によって書き記されている確信や信頼こそが、まことの推薦です。けれども、彼らは、神の恵みによってパウロたちに与えられたところを、自己推薦によって入り込んでいる問題を取り上げます。

1B コリントへの福音宣教 12-14

¹² 私たちは、自分自身を推薦している人たちの中のだれかと、自分を同列に置いたり比較したりしようとは思いません。彼らは自分たちの間で自分自身を量ったり、互いを比較し合ったりしていますが、愚かなことです。

この偽教師たちのやり方は、エルサレムの教会からこのような推薦をもらった、であるとか、権威付けのために推薦状を持って来ていました。これも、どれだけ真実なものかかなり危ういですが、そういった推薦による競争といいますか、そういったものには関わらない、とパウロは言っているのです。そういった比較は、本当に愚かなことです。神の働きというのは、もっともっと自由なものです。恵みがあります。恵みの中では、愛と信頼関係の中で誇っていいことがあります。もし、そういったことで比較して、どちらが正しくて、そうでないのか議論すること自体、愚かなことです。神の恵みの中では口にもしたくない、醜いことです。

¹³ 私たちは限度を超えて誇りません。神が私たちに割り当ててくださった限度の内で、あなたがたのところまで行ったことについて、私たちは誇るのです。

「神が私たちに割り当ててくださった限度」というのが、神の恵みです。そういった中で、主のすばらしさを誇ることはすばらしいのです。ですから、私たちのしなければいけないことは、その恵みをわきまえることです。そうした慎み深さがあると、恵みを恵みとして楽しむことができます。パウロが、ロマ 12章で言いました、「12:3 私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがた一人ひとりに言います。思うべき限度を超えて思い上がってはいけません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深く考えなさい。」

¹⁴ 私たちは、あなたがたのところに行かなかったかのようにして、無理に手を伸ばしているのでは

ありません。事実、私たちは他の人たちに先んじて、あなたがたのところにキリストの福音を携えて行ったのです。

そうですね、パウロがエペソにいて第一の手紙を書き、そしてまた別の手紙を書き、それからマケドニアから第二の手紙を書いているのですが、それは無理に手を伸ばしているわけではありません。パウロが、他にも福音の戸が開かれていて、それでその働きをしているのですが、コリントにいる人々のことはいつも祈っていて、遠隔で仕えていたのです。その手紙を、パウロが無理に手を伸ばしているかのように批評していたのでしよう、これら偽使徒たちは。しかし、違います。パウロたちの働きによって、コリントには教会が建てられたのです。福音を携えて言ったのです。その彼らを、手紙でフォローアップすることはごく自然なことです。

2B 向こうの地域への福音宣教 15-18

¹⁵ 私たちは、自分の限度を超えてほかの人の労苦を誇ることはしません。ただ、あなたがたの信仰が成長し、あなたがたの間で私たちの働きが、定められた範囲の内で拡大し、あふれるほどになることを望んでいます。

パウロたちではなく、むしろ彼らが、人々の労苦の上に自分の働きを加えて、誇ろうとしていました。パウロたちが建て上げた教会のところに行って、そしてパウロがこんなことしていたけれども、自分たちであればこうするといつて、比較して、人々の心を自分に引き寄せようとしていました。これは、本当に良くないことです。

チャックが話していましたが、彼がカルバリーチャペルを始める前には、教団に属していました。ある教会に赴任する時に、前の牧師はとともすぐれていましたが、しっかりと建て上げられたのにもかかわらず、自分自身は後に性的罪を犯してしまいました。それでやめることになったのですが、後任でチャックが来ます。教会にはまだその傷が残っていて、まだその牧師のことを愛している人々と、罪を犯したその牧師を徹底的に処罰したいと思っていた人々に分れていたことに気づいたそうです。それでチャックは、前任の牧師のことを言及しなかったそうです。むしろ、新たに、自分の牧会によって、神の恵みが現れることを願いました。それで教会は分裂せず、混乱も起こらずに、少しずつ変えられていったそうです。その反対もありまして、自分たちがある教会を去った後で、後釜の牧師は、「チャックはそんなことをしなかったのに」と比較されてしまったそうです。それで妬みを覚えて、チャックのことを批判しながら牧会をしていたそうです。結果、何も改善しなかったそうです。他の人の働きを比較したり、批判したり、そういうことをやっても愚かなことです。主は、ご自分の与えた恵みという範囲の中で、あふれるような祝福を与えてくださいます。

¹⁶ それは、あなたがたより向こうの地域にまで福音を宣べ伝えるためであって、決して、ほかの人の領域ですでになされた働きを誇るためではありません。

もう一つ、パウロたちにとって大きなことは、新たなところを見つけることでした。ローマ人への手紙でも話していましたが、イスパニア、すなわちスペインに行くという予定を立てています(15:28)。これまでの働きは、シリアのアンティオキアを拠点にして、そこから遣わされる形で行っていました。アジア、すなわち今のトルコがあり、そこからギリシアへと渡りました。そしてマケドニアとアカイアで数々の教会が建て上げられました。今度は、ローマを拠点にしてイスパニアに行きたいと思っていたのでしよう。

このようにして、パウロは、まだ福音が宣べ伝えられていないところに行きたいと願ったのでした。「ロマ 15:20 このように、他の人が据えた土台の上に建てないように、キリストの名がまだ語られていない場所に福音が宣べ伝えられることを、私は切に求めているのです。」と言っています。これが、偽使徒たちとの対照的な姿です。すべては、主が罪人を救うために来られたところを第一にして、それで人々の語られていない所に行ったのです。偽使徒たちは、そうやって建て上げられたところに行って、パウロたちの働きを引き落として自分たちのことをやっていました。

このことは、よく起こります。これは、必ずしも物理的な話、地理的な話ではありません。例えば、西日暮里の地域に他の教会がまた新たに建てられても、人々が数多くいますから、それは立派な、主にある福音の働きですね。私たちの前よりも西日暮里で建てられている教会もあります。けれども、たとえ物理的には離れていても、「これまでの日本の教会は、こんな問題がある。」として、教会の信者たちが自分の働きの対象となっていきます。そして、「こんな教え、聞いていなかった！」として、それを教えていない、牧師への不信や批判が増えるのです。説教がもはや、キリストを見るためのものではなく、教えが正しいかどうかという裁くための対象となり、そうやって、既存の教会の中に混乱や秩序の乱れを引き起こします。

¹⁷「誇る者は主を誇れ。」

そうなんです。その人の働き、その人の個性、またはその働きがどうのこうの、というようなことが注目されていくなれば、それは誇っている、ということになります。その働きが果たして、主イエス・キリストへの信仰になっているのか？神のみことばに従っていくということになっているのか？また、聖霊の導きの中で生かされているのか？こういうことが、いつも試されています。主を誇る、というのは、必ずしも主がすばらしいと口で言うことだけでなく、いろんなことが起こっても、主こそが自分の助けである事を知っていて、教会がキリストを土台としているかどうか？なのです。

¹⁸ 自分自身を推薦する人ではなく、主に推薦される人こそ本物です。

主に仕えるにあたって、自分自身を推薦する必要はありません。主が推薦してくださいます。何か、自分自身の存在感を人々に知ってもらわないといけないと思って、奉仕の働きに携わることは

ないのです。主が、みなさんお一人お一人を引き上げてくださいます。主が引き上げるならば、その奉仕の働きは、とても喜ばしいものとなります。恵みですから、愛と信頼がそこにはあります。そして、御霊によって、人々は、この人は主に立てられていると認めることができます。これが、主に推薦されるということです。